

関連する学会・集会について（前号の再録）

1. 井上慎一氏（三菱化成生命研）より

○Biological Timingに関する日米交歓シンポジウムのお知らせ

1992年12月4日（金）、5日（土）の2日間、NSF Center for Biological Timingの研究者10名(Block, Friesen, Menaker, Kawasaki, Rissman, Thorner, Veldhuis, Shupnik, Takahashi and Turek)と日本のこの分野の研究者による2日間の公開シンポジウムが東京町田市の三菱化成生命科学研究所で行われます。多くの方の参加を望んでいます。また何人かの来日研究者には日本の各地でセミナーあるいは学部レベルの講義をお願いしています。詳細は夏頃発表いたします。要望などありましたら実行委員会、[井上（三菱生命研）、海老原（名大）、高橋（神経センター）、田畑（西東京大）、石田（微工研）、長谷川（北里）]までお寄せ下さい。尚、このシンポジウムの直前には山口大のシンポジウムが行われます。

2. 千葉喜彦氏（山口大・理）より

国際シンポジウム「概日時計研究における遺伝学と生理学の接点」が11月30日（月）、12月1日（火）、2（水）日の3日間、文部省等の援助で山口大学大学会館で開かれます。

概日リズムの分野の中心課題の一つは、概日リズムの中核的支配機構（概日ペースメーカーあるいは概日時計）の所在をつきとめ、その振動機構を解明することにあります。これまで、主として生理学的手法によって、ペースメーカーを含む組織が、幾つかの動物で明かにされてきましたし、またそのなかで、研究が細胞レベルにまで及んでいる例もあります。

一方、近年、概日リズム機構の本質的部分に関与していると想像されている遺伝子（時計遺伝子）が関心を集めています。

国際シンポジウムは、この二つの流れ（生理学と遺伝学）をうまく合流させることによって、概日振動機構を解明するための方策を皆で論議するものにしたと考えています。

論議の中では、必然的に単細胞生物を扱った生理学的、分子遺伝学的研究も重要な位置を占めます。

国内外から、10名ずつの招待講演者を予定していますが、一般講演（ポスターになるかも知れません）も計画したいと思っています。

生物リズム研究の分野に課せられた課題は、生物科学のすべての分野にまたがり、さらにそれに関連する人文、社会科学などの分野にまで広がりを見せています。リズムの種類についても、概リズムのみならず、生物の振動現象を広く視野に入れる必要があるような気がします。私は、新しく体制を整えつつある生物リズム研究会に、この広さを期待します。

われわれの国際シンポジウムは、リズム研究分野のごく一部を扱うものですが、研究会の新発足に際して、わが国における研究発展のために少しでも刺激になるものになればと願っています。多くの方のご出席をお待ちしています。

3. 中島秀明 (岡山大・理) より

1993年9月に国際植物科学会議が開かれます。このときリズム関係のシンポジウムが中島とHastings (ハーバード大) を中心にして行われます。題は「Circadian rhythmicity: cellular expressions and molecular mechanisms」です。演者などくわしいことが決り次第ご連絡します。